

猫だちとくして



青島啓子

「名前はまだ無い」子猫が今ひそかにいる。通りすがりの家から引き受けてきて、もう二週間になるといふのに、名が付かない。

その家では、物置での子猫がお産をし、ママ猫に一ひきだけ置いていかれてしまったと、困りはてていたところだった。わたくしは二日続けてそこを通り、懸命になく子猫の声に心配が満ち、とうとうくぐりを入れて、結局しよこんでしまったのである。

生後まだ十五日か十六日という大きさだった。例によって哺乳瓶で格闘する何日かが過ぎ、ようやく意識を食へるようになり、ミルクも、最先をつこんでむせながらも、なんとかひとりで飲めるようになった。

今はしっかりと足が立ち、わたくしが餌下を投げは追いつける速さも相当なものになった。足音さえ一に人前にひびく。

もう少し経ったら、むこうの家へ移さなければならぬ。あの犬勢の猫だちの所へ。なぜなら、ここはわたくしの仕事場で、猫がいては仕事にならないからである。

むこうの家というのは通称猫やしき。ここから五百米位西にあり、毎日文字通り車通りで通っている。この妙な暮らしについては、先ごろ出版の『愛をくれた猫だち』に知った。その時二十六にんだだけだ。最近急増急減して、今また二十七にん。

そんな中へ、種々の病気のたまり場のような中へ、小さい子を入れるのは冒険である。この怪雨の間に五ひき来し、すでに三ひき亡くなった。二ヶ月位の子だちだ。だから何とかなれるかと思ったが、だめだった。この小さい子が耐えてくれるだろうか……。

この時期は辛いことが多い。いわゆる捨て猫ノーストだから。表を歩けば「かわいい子猫さし上げます」のはり紙、新聞を開けば「子犬 子猫 上げます」の欄が、いつもの三倍か四倍のスペースを占めている。この子たちがみんな幸せになれる保証はない。愛犬家、愛猫家の面をかぶって、実験用に集めて回る人間がいる。また、大丈夫だと思って渡した猫が、火ぶくられたりけになつて舞い戻ってきたという、ぞっとする話も聞いた。あんなに慎重に調べたつも

りなのに、愛猫家だったの、と、悪戸の訴えだつた。

現在、黒猫派としてはとても盛んな時代なのである。だから、不妊手術しかけてはいないと認める。かなり一般化してはきたものの、こんなに広告が出るようでは、普及しただけと言わざるを得ない。今は手術の技術も進んで安全になったし、料金が平ってきた。自治体によっては補助金も出している（東京圏はまだだが）。産れた子を処分する辛い思いに出れば、懐の痛みは我慢できよう、現象は、我々にとって、短期間に何ひきも殺さなければならないという状況である。辛いことだ。

辛いといえば、この時期のみとりも辛い。養分、早めのみとり直給を付けてしまえばあまり苦労せずすむのだが、その頃は例年黒猫の子がいて、付けられない。直給に必要とされた薬の副作用で、体力の落ちてくることは危険なのである。もう少し待てたら、と思っているうちに、急に重くなったたりすると、たちまちぐちゃんのみがうごめきたす。

スライムレス紙のみとり極という物がある。これは冬場でも手放せないものなのだけれど、こういう時、直給の代りに威力を発揮する。この極で毛を握ることが夕食後の目撃となり、用事があつて一日でも短くなる。

一日取ればはひききの

と、三三歳かときのため息をつくほど、極の上は黒々となる。

ひつかかたのみは、そばに寝落ちを認めておいて、そこへ寝る。寝落ちはいいのだが、いつそ一眠りの方がと書き、殺生を疑はれる。

「いやな仕事なのに、ふしぎとやめられないんだよね」

と矢という。ほんとに、知らず識らず、まだあの子がすんでない、と、いやがる子を追いかけてしまつた。そして二十なんにん一まわりすむと、ヒトの手は硬直し、それを撫でながら、自己嫌惡に陥つてゆくのである。

編集部からは、ねこの生活のたのしみとくるしみについて書けとのことであつた。くるしみは山ほどあり、現にここでも書いてしまった。「たのしみ」を求めるために、猫を飼っているわけではなから、それはないと答える方が正確であることと思う。

ただ、結果としてうれしくなることは多々ある。病気の危機を脱したとき、手術から無事に帰ってきたとき、ぐそをかいていたら涙をなめてくれたとき、胸にすがつた黒の子がうごとりと顔を舐めてくれたとき――この子猫はすぐ眠ってしまった。

「たのしみ」を一つ見つけた。毎日無量さんからちらを買ってくる。ときどきおまけにおじの頭と中身を包んでくれる。人間界の価値にはおかまいなく、おじの方が好きという子が多い。困いのをかじれない子には、中骨についている骨をこそおとしして与える。骨ばかりになつたのまで食べてしまつた子もいるが、先日、天ぷらのついでに揚げてみた。カリカリと、とてもおいしい。

ヒトはねこの名前をはねて、ヒールの音にした。ヤッターという感じ。これこそ、猫がいなければ絶対かたがたされたのしみである。この「たのしみ」をたつた一つのけいひとして、この先わたくしともは猫を引き受けるのであるわが。おま。

(おまじき・けいひ エアヤスと)